

くまで、七十一二三四、八十一二三四、九十つ  
 たらほうしゆや、ほまめや、ほうしゆや、かぐら  
 や、ちいとおんまるめで、これで一かんよせ、お  
 てさんむろく、おかしわしろかね、……(とまへの  
 如くつづきちよいとおんまるめでこれで二かんよ  
 せ三かんよせとついでくのであります)

同

同

うけ——とつた、うけ——とつた、これから、ど  
 なたにおさ——しもうす、むこうえめいやる、お  
 こうしづくしの、しろかべづくしの、あかいのれ  
 ん、をさぞへか、つた、しとやのなのいに、たれ  
 におわたしもうす——ぞ、それからおひとがない  
 とて、あざのあざづき、てうちんにてうで、たい  
 まつ三ぼんで、やらかした、く、またあとさぬ  
 よーにうけとらしよ、く



端午の話  
 たんご はなし

せ  
 く  
 生

年中行事の中、古來最面白く又最盛に行は  
 れつゝあるものを選出して、これまで語り來つた  
 例によりまして、今度の語草には、五節句の一で  
 ある端午を話す事に定めたのであります。扱この  
 五月五日は端午といふが、彼の重陽を名づける  
 九月九日の節句を重九といふと同じ様に、亦重五  
 とも申すのであります。この端午の節句には、菖  
 蒲草を大切な節物としまして、家々の檐端はこの

草と艾とで葺き飾られるのみでなく、昔は頭の飾にした菖蒲鬘や頭の臺にして寝る菖蒲枕、沐みをする菖蒲湯にも又愛でたく飲まうとする菖蒲酒等にも用ゐられました。それ故に又菖蒲節句ともいふのであります。そのみならずこの日を祝ひます爲に近世は盛に旗幟甲冑人形等を樹てる様になり、之にそへて粽かしは餅等を製りまして、親戚やら懇意の人達やらの間に遣り取りをしまして、俗間では之を男子の節句といひ習して居るのてあります。

第一 端午の名の意義

五月五日を何故端午と名けたらうかといへば、思ふにこの端の字は「ハジメ」で午の字は「ウマ」の日であるから、昔端午といふ日は強ちこの五日に限らないで、何でも五月の初の午の日であつた

に相違なからう。然るに其の午は五と同音である所から、又偶然に五日に當つた事などがある所からして、何時しか端午が事實上の端五即重五に定まつたとは、丁度彼の節句が最初三月の上の巳の日であつたのに後世は己の日であらうがなからうが、其れに係らずして、三日といふ雛節句に變つたのと全然同様だと思はれます。

第二 菖蒲と艾

(一) 菖蒲鬘 天皇を初め奉り朝廷の人々以下一般に此の飾り物を附けました事は、天平十九年五月聖武天皇の詔に「昔は五月の節句には常に菖蒲を以て鬘とせ壁にあらざる者は宮中に入るゝとされ」とあり、尙之より四五十年前に山前王や大友家持の咏まれた歌などを視ますと菖蒲ばかりでなく、艾をもそへて鬘にしたとが知られます。鬘の様は時々によつて此の後も色々

に變つた事は、丁度今日婦人方の簪等が一定して居らぬと同じ事であります。

(二) 屋根 スツト昔の正史の類には、此の事が見えて居りませんが、源高明の西宮記に「五月四日、夜主殿寮内裏殿舎葺三草蒲」とあり、又枕草子には「草蒲艾などの香り合ひたるもいみじうかかし九重の内を始めて言ひ知らぬ民の住家までいかで我がもとにしげくふかんと葺さわしたる」とありますから矢張中古時代から、この草々で屋根をふきました風が上下一般に行はれたといふ事實が知れます。

斯様に此等の草が當時珍重されました故は無論確には言ひされぬ事ですが、思ふにこの期節は葛蒲も艾も最よい香氣のある時で、悪疫邪氣を拂ふには此の上もない藥草であると信せられたらう

といふも、強ち生一人の臆測でありませぬ、彼の本草家の書物には皆其の機能が記してあるのです。

(三) わやめの枕とわやめの蒔 今日では餘程昔好きの御方でなければせぬものでせうが「都人引きな盡しそわやめ草かり寐の床の枕ばかりは」(雅類)「立花にあやめの枕香ふ夜は昔を恣ぶ限りなりけり」(俊)などの歌は鎌倉時代のであります。尚下つて足利時代の書物や記録にはこれに似た事が澤山あります。「凡五月五日あやめ草をもて屋の軒に葺き、或は髪さなし或は續命縷に作り、或は枕にしく事皆時の邪氣を避け拂はん爲に用ゐらるゝなり。又同日あやめの蒔を用ゐらるゝこと三百年前よりあり五月四日の夜草蒲の御庭枕をりて敷せられて御しづまり候」

と殿中御對面記にありです。この他續命縷即藥玉に草蒲を附けます事や、葛蒲蓬をつみて内裏に上るといふ草蒲の興の事、そ

れに又菖蒲の根を細かにきりて酒に漬けて服する  
七蒲酒の事や、四肢屈伸の不自由なるもの小兒の  
弱さものが功能あるといふ菖蒲湯の事などについ  
ても、一應語るべき次第ですが、餘り面白くない  
事故省かします。

(四)「ちまき」

「ちまき」の意義は何うであらうか。(一)我が國上  
古の風俗で貴び用ゐた武器の一つに「茅纒の稍」  
といふものがありまして、幾重もまく即干巻の意  
味の名で端午の「ちまき」は其の形によく似通つ  
て居る故に、矢張千巻といふので、菰でも茅でも  
笹でもよいも、皆「ちまき」と云のだらう(二)最  
初は凡て茅でまいたから「茅まき」といふので其  
他の物を用ゐるのは皆後世の事であるといふ二  
説あります第一の方が當つて居りませう。扱

れには其の形、其の材料によりまして菰粽、菱粽、蘆  
粽、笹粽、飴粽などの名があります。

粽は我が國では陰陽包裹してまだ分散せぬ形に  
形どつたといひ、支那では泊羅に投じた屈原への  
供物から始まつたとか、高辛氏の惡兒難船して水  
神となり粽を得れば波濤を立てずなといふ事から  
始つたといふ事は皆信せられぬ附會説でありまし  
て、生は矢張我が國上古の風が草木の葉を食器に  
用ゐた事が笹粽、茅粽となり、又彼の柏餅なども  
もなつたのだらうと思ひます。

(五)菖蒲胃と胃人形

鎌倉時代より足利時代にかけては、端午の玩物  
に菖蒲胃といふ者を作つて其の形も色々ありまし  
た。石戦の折などには之を冠りなどして騒いだ様  
であります。益軒先生の日本歳事記の端午の菖蒲

胃 太方の事をいへる所に「此の事昔は厚き紙に人形を拵へ或は蒔の葉にして馬を作り或は木を長刀の如くにけづりなどして戸外に立て侍りしが近年は風俗美巧を好みて木を以て人馬の形を刻み、又張子にして彩色を施し或は甲冑をきせ劍戟を持たせ、戦鬪の勢をなましめて戸外に立て侍る是を靑人形といふ」

とありませすが之は徳川四代將軍家綱公の貞享年間の事、其の次の元祿時代には一層これ等の事が盛りになりました。

(六) 幟と鯉

軍人軍馬に大小の旗等を交ぜまして戸外に立てます事は、尙武時代にはこの菅蒲節句に最似合ひたる儀式でありませう。夫故彼の五月幟として、色々繪をかきたる幟を立て並べる事は徳川時代の初より中々盛なものであつたと見えまして三代將軍家光公の正保慶安の町觸にも「前々より小旗の義絹布一圓仕るましく候」。又四代家綱將軍の萬治二年四月十六日「毎年申觸れ候如く五月節句の甲結

拵に仕るましく云々」など干渉がまじき法令が出ました。正村の句にも五月幟をよんで「門や又立ち榮ゆべき紙のぼり」などあります。之は寛永頃のことですが、追々布幟が流行して参りつて、張良辨慶、義經、武内宿禰などの繪は最も多く書かれました。して見ればこの幟などは少くとも出生男子の武運を祈り長壽に肖からしめたものだらうと思はれます。

鯉を幟と同様に立て並べる事は戦争の時の吹流しを押立て、我が勢力を張ると同じ意味でありませう、其の何故に鯉を之に用ゐるかといふ理由は思ふに支那で黄河の龍門を登つた鯉が龍になれるといふ故事がある爲に鯉を出世魚などと申すはかりでなく又粗上に載せられた鯉が死に臨んで從容迫らぬといふ大悟した武士の氣風を具へるので

武士道を貴ぶ封建時代には中々重ぜられたものでしたから、行々武士に出世し名将とならん望ある男子の出生には節句の祝として鯉の吹流はなくて叶はぬものとなつたのでありませう。

(七)端午の遊戯

此の日に印地打のあります事は南北朝時代の洞院公賢卿の園大曆に「五月五日天陰或雨今日賀茂社競馬神事如レ例。彼是云、今年天魔流行匪直世事、云々童等結ニ構菖蒲甲ヲ即學ニ合戦ニ所々催ニ其興ニ童部ノ親類以下成人武士等相交、刃傷殺害ノ所々及テ數輩ニ云々誠ニ不可レ説事歎」とあります。夫から下りまして「けふさすは印地のしやうぶ刀かな」と寛永發句帳にあります。抑此の頃に幟を立てたり彩色した紙又は布で巻いた木刀をば菖蒲刀と名づけ之を抜き連れて戦ひの眞似して遊ぶを菖蒲

切といひましたが是は全く石戦の遺意でありませう。又之に似て菖蒲叩といひますのは子供等が菖蒲の葉を繩に縛ひまして之で地を叩いて遊ぶのです。地方によりては之を旅人を苦しめ婦女子等を泣かせる程やつたさうであります。

結婚論 (承前)

野本生譯

斯くいへばとて、予は敢て、我國富豪の家庭を悉く非なりといふのではない。予が知人の中には富裕多福なるに拘はらず、其の家庭の空氣は、常に、清淨和順にして、世の善良なる男女子たるに必須なる要素を表示し、其の模範となるべきものがいくらもある。予は、又彼の門閥家が、眞面目に、自己祖先の美を誇るに對しては、豪も、批難

すべき點を見出さざない、のみならず、却て、予は之れを稱揚する。予は、我が米國に於ても門閥、舊家の誇るべきもの多からば、其の多き丈け、更らに妙なりしならんと思ふのである、家系門閥は青年諸士に對して、偉大なる感化力を興ふるもので、人若し名門舊家の出ならんには、其の家名に耻ぢざらんとするは勿論、更に、進んで、之れを發輝せんが爲めに、感奮努力するやうになる。此の故に貴き家名は、其の青年者に取りて、自己体面の保護上、最も強固なる橋壁となるものである。家系は決して、輕忽に付すべきものではない、吾人は、須らく、各自、其の祖先の美を稱揚し、又大に、之れを誇るべしである。然れど、慢心、他を輕んじ、或は、自己祖先の比較輕重を爲し、妄りに、他の家名を中傷するが如きは元より不可で

ある。是れ、其の精神の陋劣なるを自白するものにして、苟も、亞米利加人としてなすべき所業でない。又、人、若し、幸に多少の財貨を有したればとて之れが爲め、其の財貨を有することの已れより少き他の人々の善を拒否することは出来ない筈である、予は、富家の子弟が如何に優さしく養育せられたるか、其の心意道德が、如何様なる注意と保護の下に發達したるか、又其の子弟の心中は如何なる希望目的をもて圍繞せられて居るか、此等の事を詮索するのではない。唯だ、其の子弟の有せる眞價値に對して、質素にして、富裕ならざる良家の女子を配偶せしめんと努むるのである。然れど、「併し、彼の女の身分はどうである？」是れ一般、世の高慢なる母親の先づ第一に問ふところである。身分？、何をか身分といふ？、其の女

子にして、優さしく、愛すべく、且つ、又、眞實ならんには、何ぞ、身分の高下を問はん。其の女子の價值性格は、虚偽なる標準の能く計り得べきものならんや。身分てふ社會上の地位は、道義的精神の高尙なるに比すべきものであらうか。女子とし妻としての善良なる性格に比ぶべきものであらうか。又、母としての眞義責任の至極に通曉せる彼の女の正しき思想に對比し得べきものであらうか。彼女は、馬車を驅る富家の子女に比して、其の女としての本分に缺くるところあるか。彼れは、善良な妻女となるに、富家の女子に比して劣れる所あるか。抑も、世人は、何の爲めに結婚をなすか、世俗の意向に適せんが爲か。將、又、虚偽、斯の如き世俗の標準を守らんが爲なるか。虚榮心は、常に、我等の家庭に、憂苦を伴ひ來るの

外、更らに、此の世界に對して、數多の障礙を爲したり。我が青年諸士は、其の周邊の附帶物によりて女子を評定するの愚をなさず、須らく、單に女子其物によりて、女子其物を判定するの度量を有せねばならぬ。眞價は能く久しきに堪へ、其の全く、損滅するに至りて始めて止む。女子の愛情は女子が男子に齎し得るところの、すべての富、凡べての技術、藝能に優ること萬々である。一年三百六十五日、絶えず、男子の周邊に來往するところのものは、實に此の愛情である。金は多くとも、心懸次第にて、世は渡れる。併し、愛情は多くなくて叶はぬ。愛情の多きは如何に多くとも其の多さに過ぐるといふことは決してないのである。

又、之と反對に、女子が、男子の收入財産にの



み、重きを置く場合にも亦此道理は同じく眞理である。青年者の眞價を判定するに、唯だ、其の求婚當時の地位境遇によりて、其の標準を定むる事は、頗る、殘酷な仕方といはなければならぬ。予は元より、「貧苦の戀愛」を懲憑するのではない。然れど、若し夫婦が始め相應なる収入をもて世に出で、後、相携へて、漸次、富貴榮達の域に進むといふ昔時の説論は甚だよいと信ずるのである。最も、是れは、往々、小説、物語の中に見るやうな餘りに都合よき妄想らしいが、此の中には多少眞理の掬すべきものがあることは事實である。女子、若し、嫁して安全ならんを欲せば、徒らに、豪奢の生活に慣れて、其の働き勤むるや、是れによりて、人生の志望目的を達せんが爲に非らずして、一時偶然の發作に止まり、常に遊惰安逸を好

める富家の男子に行かんより、寧ろ、中産の家に生れて、正直勤勉熱誠ある。男子を撰ぶべきなり是れ、予が、深く信じ、固く主張するところである。世の男子にして、體軀健全、強固なる主義識見を有し、常に聖帝を信じ、克己節制、勤勞を恐れず、心に、常に、必然の成功を期し、能く、世路の難險に勇進するの概あらば、予は、決して、其の貧しさを厭はない。否、斯かる男子こそ、米國家庭に養育せられたる女子の正に信頼するに足べきものである

(不完)

### 寡婦と愛子

(アーキング)

(ついで)

一 一一 三 譯

此慈母の苦痛と愛情を何處迄も傷めやうとする

のか、それ／＼冷淡な指圖があつて鐵の刃が、砂や石に當る音もした。實に吾愛せる者の墓に此物音を聞く程、氣も魂も滅入る次第である。此騒がしき物音に果敢ない沈思から醒されて、老母は涙に満ちた眼を上げて、恍惚と力なく四周を見ました、今や人々は棺を墓穴の中に下さうと、綱を持つて近付きました時に、老母は我と我が手を握りしめ、ワット悲歎の涙に暮れました側らに介抱して居た一人の女が、老母の手を取り抱き上げて、「まあ／＼其やうに御心痛なさるな、と慰め言葉を言つたけれど老母は頭を振り手をしめて、少しも慰められぬやうでした。

人々が、遺骸を地面の下即ち墓に下した時に、繩のきしめく音を聞いて老母の心は何うでしたらふ、何うしたはづみか、棺桶が何かに衝き當つた

やうな音がしたから老母は優しい心から愕いて、いと聲を出した、畢竟老母は、吾兒が人間界の苦痛の外にあるとは思はず、矢張り苦痛が起つたのかと思ふたからでありました。

私は是に到て、見るに忍びませんでした、私の胸は迫り、私の眼は涙で一杯になりました、私は別に用のないのに、慈母の悲歎の有様を見て居るのは、何か氣が咎めるやうに覺えましたから、墓場の別な所へ行つて、會葬者が散ずるのを待つて居りました。

私は、老母が此世に唯一人可愛がつて居つた、獨り息子の遺骸を墓場に見捨て、悲しげに、又苦しげに、やつと墓を出て、そして、淋しい己が佗住居に歸つて行く後姿を見まして、其心の中を察しますると、私の胸も張り裂くるやうに、

悲しく思いました、私は次の事を思ひ續けました、  
 全体富人の悲哀と言ふのは如何なる者であらう  
 か、富人等は慰める友もあり、憂を忘れる娛樂も  
 あり。又悲哀を散じたり、外に移したりする事の  
 出来る世ではないか、又年少者の悲哀とは、如何  
 なる者であるか、その發育して行く心は、すぐ疵  
 を愈し、又其彈力即ち抵抗力に富める精神は、壓  
 迫を排して高まり、其活潑な移り易い愛精はすぐ  
 新しい物に纏ふものである、けれども、貧民の悲  
 哀は、外から慰むべき方法はないのである、まし  
 て、老年の悲哀と言ふものは、要するに、冬枯れ  
 の日のやうな浮世佗びしく、再び歡樂を求むると  
 言ふ事は能はぬのである、殊に寡婦の悲哀、即ち  
 老年で、獨り身で、貧亡で、この世に唯一人の子  
 の墓に涙を潑ぐ、この老寡婦、あはれ晩年の杖と

も頼むべし最愛の子に先立たれて、あゝ氣の毒と  
 思ふにつけ、私はこれこそ到底慰めても無益だと  
 言ふ事を感じたのでありました。

私は尙暫らく、墓場に立止つて居りました、そ  
 れから、程なく家路に向ひました時、路で一人の  
 婦人に逢ひました、その婦人は先程老母を荐りに  
 介抱しながら、慰めて居た女でありました、聞け  
 ば老母を佗住居に送り届けて、今歸り路だとの事  
 でした、私は此婦人から、今迄私が見た、哀れな  
 光景に關係した詳しい話を知る事が出来ました。  
 そも、此死者の親は、固と幼少の時から、此村  
 に住んで居りました。小ざつぱりとした家に住ん  
 で、農業に従事し、畑に手を入れたりして、人に  
 悪く言はれず、愉快に過ちのない月日を送つて居  
 りました、夫婦の中に一人の子息がありました、

生長するに従つて、親々の杖ともなり、亦自慢話の種ともなりました。「ほんとに好い息子さんでした」と、件の婦人は言つて、尙語を續けて「誠にあの息子は、善い若者でした、氣質の穩やかな、近所の人にも親切にして、よく親に仕へました、日曜日には晴着を着て、ずらりと丈高く恰好よく、笑顔をしながら、寺に母親を途つて行く様を見る」と、人の邪しな念慮も拂はれるやうに見えました、又母も自分の話し仲間の誘ひより、獨り息子の「ジョージ」の腕に凭れて行くのが、何よりの好物でありました、それもその譯で、この界限には、あの子より美しいのは、一人も居りませんでしたから。」

不幸にも、此若者は、或年景氣が悪く、農作の外れた年の事でありましたが、近隣の川を往復

する運送船に雇はれる、身となりましたが、程なく海軍の募集隊に捕へられて、海に連れられて、無理遣に水夫の中に加へられました、此報知は兩親の許に來ましたけれどその外の事は少しも知りませんでしたが、とにかく是か兩親の身にとりましては、誠に大黒柱を失つたやうな者でした、故に、父親はとかく氣分の勝れなかつたのが、是から元氣なく益々涙脆くなつて、終に墓場の土となりました、老母は獨り世に取り殘されましたが、老衰の身の、とても生活を立つると言ふ譯にも参りませんから、公に補助を仰ぐ事となりました、けれども、村の人は何かと温き精を寄せ、此村の古老の一人として尊敬しました、是迄住んで居ました家は、誰も外に求むる人もありませんから其儘住んで居りましたが、前日の幸福な有様とは引

換へて、實に淋しく三度の食事は庭から取れる少許な者で、濟ましたが、之は近所の人か時々來て、耕して呉れるのであります。

今から二三日前の事でした、老母は食物の用意をしやふと庭に出で、野菜を集めて居りました時に、不意と庭に向いた戸が開いた音を聞きまして、と見れば、見馴れぬ一人の男が來て、暮りに熱心にそこら見廻して居りました、身に水兵の服を着て顔の色は蒼白う瘦せ衰へて、病苦と困難とで、身軀が摧かれたやうに弱り果て、居た男でした、此男が老母を見ますと、急いで走り寄りました、けれども、其歩き方は誠に力の無い、足元かひよろしくとして、老母の前に倒れて小兒のやうに涙に咽びました、老母は氣の抜けた顔に、屹驚したやうな眼で、此男を見ました、此男は堪へ兼

たと見えてかう、言つて叫んだ。

「お、母上よ、お前はお前の子を知らぬのか、私

お前の子の「シヨージ」である、

と言つたので、母はよく見ますと、嘗ては立派であつた、吾子の成れの果でありました、病氣と他郷の空の禁錮で、受けた負傷の爲に、見る影もなく瘦れて、せめて、自分が幼時の光景を過した、故郷の土に眠らうと思つて、惱んだ足を引ずり、這々來たのであります (未完)

衛生上の注意

墨 水 生

世に氣の毒なる者まことに多し。中にも遠大の雄志を抱きつゝ、不慮の非命に其の身を失ふ者の如きは其の尤甚しき者たり。さて斯る際までに

に至らずして所謂「残念なりき」、「遺憾なりき」等  
いふ程の氣の毒加減なる中には、斯くならぬ以前  
に注意し豫防して、其の不幸を免れ得べき事少な  
からず。今其の例の一として諸君を紹介し、又自  
の戒ともなりたきは衛生上の一實話なり。

予の友に某君といふ醫學生あり。國は三州岡崎  
在にて、夙に中學を卒業し高等學校に進みて遠く  
加賀の金澤に在學せしも、一昨年以來病の爲に休  
學し療養をさくゝ怠りなし。

君は既に醫學に心得あることゝて屢々余に語て  
曰く、初め僕は金澤に行きしより別段に苦痛を覺  
えずして只何となく次第々々に疲倦を感じたる  
共に少しく全體に膨みを來たし心臓の鼓動さへ稍  
異狀なりしに氣付きたれば、學校の醫師に診察を  
乞ひしに、脚氣なるべければ轉地こそよけれと勸

められたれとも、生來頑健の性なりしと、修學の  
後るゝを嫌ひしとにて、苦みを忍び呻き吟きて服  
藥しつゝ、漸く一年の試験を経過したれば兎も角も  
出京して、其の専門醫の治療を乞はんとて眞に○  
博士に診察せられしが、矢張脚氣なりとて歸國  
の宜しからんを教へられしまゝ、其の如くせること  
一夏一冬なるも聊の効驗なきのみか體は益々膨れ  
來りて眼は塞がらん許なるに打驚き最早打捨て置  
かれもせず、土地の病院に行きしに、今度は先づ  
尿を檢(ざりき)べしに尿中に蛋白の多きを發見し  
直に腎臟病なりと判定せられたれば、今までの手  
當は害ありたればとて何の益もなかりけりと一度  
は驚き一度は喜び直に入院して安靜療養(体ヲ助サ)  
を施し日々牛乳を六合つゝ用ゐしも空腹堪へがた  
ければ終に八九合より一升を用ゐて殆半年を過ぎ

たりしも蛋白の排出量は更に減せざりき。

憂悶の極退院して又出京し〇〇堂に入院し〇〇博士の治療を受けしと三ヶ月許なりしも是亦はかくしき効能無なきより最早殆と絶望せんとせしむ。

本年に至りて或る人の勸によりて腎臟病糠尿病専門家たる〇醫學士に行きしに正しく慢性の腎臟炎なるにて該病を第一期(發病して蛋白)第二期(身體膨内の組織變)第三期(縮し尿排出せられ難)と分ちたる第二期に進みたるにて猶全癒の望あれども療法を誤まれば第三期に陥るなりとのをに驚かざるを得ずして直に家を其の醫師の側に借り、母を國より招き來して今まで殆ど三ヶ月療養せり。

専門醫の甲斐ありて膨は全く去りて排出蛋白亦著しく減少したれば此の分にては再び學校に歸る

とも出來べけれど生涯酒類香料を禁せられ、激烈の運動又烈しき熱病等して再發せしめざるべき注意は中々容易の事ならじ。

藥は水藥二種散藥二種丸藥一種にて二日分づ、代價貳圓〇五錢つゝ(亦し之に尿原料)にて即一日分壹圓貳錢五厘に當り、牛乳は少くも五合を下らず肉は柔き鳥肉魚肉(赤色の)にて、運動を忌む爲め車にも乗らず草履にて徐々に通ひ居れりと。

前途多望の氏が醫學が修めんとして自ら此の難に罹る。幸にして、家計豊かなる氏なればこそ、日々悠悠として全快を待つを得べけれども貧しき者のいかで如此なるを得べき。終に不治の悲に陥る外なかるべし。氏尙曰く此の病は實に難病にて其の治し難き点と餘り苦を感じずして衰弱するとは肺病と兄弟分なるべければ世の虛弱者とて顔色わ

ろく然も肥え太りて倦怠疲勞を感ずる如き人は早く注意して其の尿を検査すべきなり、且婦人小兒の虚弱性の者は冬季は寒冷に當るを防がんが爲に腰部腹部に厚き毛布を巻きて此の病の發生を防ぐべく殊に平生運動不十分にして美味のみ用ゐ安逸に耽る上等社會の婦人方には此の病の割合に多き由なればかへすくも各自々豫防策の肝要ならんと語り續けられたるまゝ、已れ一人聽き置くも惜しければとかくなん。

“Fröhliche und Mäszigkeit sind die besten Arzte.”

嬉樂と適度とは最良の醫師なり



雲の上

●東宮の東北御巡遊 皇太子殿下には來る五六

月の交を以て御見學旁々群馬、長野、新潟、青森宮城の各縣下へ御巡遊あらせらるゝやにて目下大迫侍従、錦小路御用掛等以下數名は同地方へ出張檢分中の由なれば其歸京の上行啓期日も御決定相成る可き筈なりと承はる。

●東宮妃殿下の御着帶 皇太子妃殿下には昨年

九月御妊娠あり同十一月内々御着帶の御儀あらせられしが其後日増に御健勝に渡らせ玉ひ先月十五日午前九時、青山東宮御所にて御吉例の御着帶

巢

報

